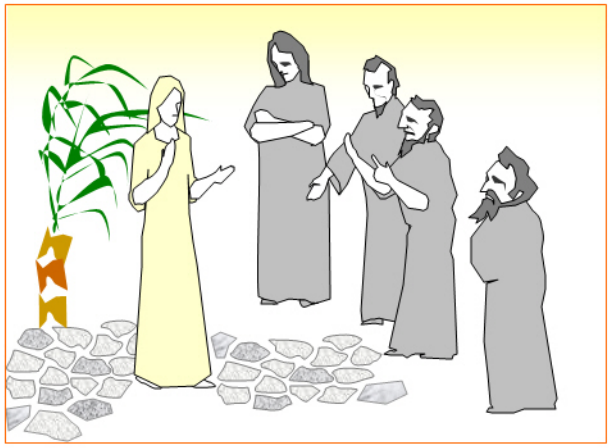
# 福音のヒント　年間第 26 主日(2020/9/27 マタイ 21 章 28-32 節)

**教会暦と聖書の流れ**

マタイ福音書では、21章からイエスのエルサレムでの活動が始まります。神殿の境内で、イエスは祭司長や民の長老という当時の指導者たちと論争しています。この「二人の息子」のたとえ話はマタイだけが伝えていますが、マタイは、直前の箇所(23-27節)の権威についての論争で洗礼者ヨハネを「信じなかった」当時の指導者たちの姿が現れるのを受け、同じテーマの話として、このたとえ話を伝えていると考えることができるでしょう。

**福音のヒント**



(1)　このたとえ話は、さまざまな写本を比べてみると、細かいところが微妙に食い違っています。大きく分けると 2 種類になりますが、1 つは (a)新共同訳のように、最初に父に頼まれた息子が言葉では拒否しながら後で従い、次に頼まれた息子は言葉で承知しながら従わなかった、という順序のもので、もう 1 つは逆に、(b)最初の息子は言葉では承知しながら父に従わなかったが、別の息子は承知しなかったのに結局は父に従った、という順序になっています。(b)のように最初の息子が父の願いに従わなかったので、別の息子に頼んだ、というほうが論理的には自然でしょう。しかしだからこそ、写本が書き写されるときに(a)が(b)のように変わっていったとも考えられます。なお、(b)の順序は、ユダヤ人がイエスをキリストとして遣わした神のみこころを受け入れなかったので、救いが異邦人に及ぶようになった、という初代教会の理解にも合います。結局、どちらの順序が本来のものか、確実なことはわかりません。

(2)　28 節から 31 節の「『兄の方です』と言うと」までの部分(この箇所の前半部分)だけを取り出してみると、このたとえ話は「言葉でどう応えるかではなく、行動で神に従うことが大切である」ということを教えるたとえ話だ、と感じられるのではないでしょうか。しかし、たとえ話から導き出される教えの部分(31 節の「イエスは言われた」以下)によれば、このたとえ話は洗礼者ヨハネのメッセージを受け入れた「徴税人や娼婦」と、受け入れなかった「祭司長や民の長老」たちのことを表していて、行動の問題というよりも、「回心の呼びかけを受け入れるかどうか」ということがポイントになっています。このように、たとえ話自体とその後の教えが完全に一致しないと感じられるため、前半と後半は本来、別々の話だったのではないかと考える人もいます。

(3)　きょうの箇所全体を一つのメッセージとして受け取るならば、注目すべきなのは、29 節と 32 節に出てくる「<u>後で考え直して</u>」という言葉でしょう。「考え直す」はギリシア

語では「メタメロマイ metamelomai」で、「考え(関心)を変える」という意味の言葉です。一般的には「メタノエオーmetanoeo(悔い改める)」のほうがより根本的な「回心」を表しますが、ここでは洗礼者ヨハネのメッセージとの関連で「メタメロマイ」が使われていますので、「メタノエオー」と同じような意味で使われていると言ってもいいでしょう。**本当に神の呼びかけを深く受け取るかどうか、そして、自分を変えることができるかどうか**、がここで問われているのです。

(4)　「子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい」(28節)という言葉は、先週の「ぶどう園の労働者」のたとえ話(マタイ20章1-16節)を連想させるかもしれません。あのたとえ話で夕方まで誰からも雇ってもらえなかった人々の姿を思い出すならば、ここで父が願っているのは、息子たちに辛い労働をさせて苦しめることではなく、**父のもとで生きる喜びにすべての人を招きたい**ということだと言えるのではないでしょうか。

徴税人と娼婦は当時のユダヤ人社会の中で、罪びとの代表とされていました。周囲の人々から神の救いに程遠い人間と考えられ、自分自身でも救われる可能性はないと思っていたような人々でした。洗礼者ヨハネのメッセージは、このような人々に希望を与えました。「すべての人は今回心しなければならない」ということは「どんな人でも今回心すれば救いにあずかることができる」ということでもあるからです。洗礼者ヨハネが示した「**義の道**」(32節)とは回心して、洗礼を受ける道でした。正しい行いをするという以前に、**何よりも自分の罪深さを認め、神に立ち返る道です。**イエスもこれこそが神との正しい関係のあり方だと言うのです。

(5)　一方、当時の社会・宗教の指導者たちはヨハネのメッセージに心を動かされませんでした。彼らは洗礼者ヨハネの回心のメッセージを悪いものだとは思わなかったでしょう。しかし「自分たちはちゃんとやっている」と考えた人々は、洗礼者ヨハネの回心の呼びかけを自分たちに向けられたものとして真剣には受け取らなかったのです。「回心すべきなのは自分たちではなく、他の連中だ」と考えたとき、彼らは自己満足と優越感の世界に陥り、生ける神との関係も、人と人とのつながりも見失ってしまったと言わざるをえません。

このたとえ話の中で、弟は「承知しました」と言いながら、なぜ出かけなかったのでしょう。理由はどこにも書いてありませんが、やはり、**父親の呼びかけをまともに受け取らず、本気で父親とともに生きようとはしていなかった**からなのかもしれません。

(6)　「あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった」(32節)の「それ」は「徴税人や娼婦たちは信じた」ということです。ここから考えると、当時の指導者たちには2つの回心のチャンスがあったということになるでしょう。1つは洗礼者ヨハネが回心を呼びかけたこと。もう1つは罪びとのレッテルを貼られ、神から断ち切られたようになっていた人々が洗礼者ヨハネのメッセージに応え、神に対する信頼と希望を取り戻していった姿を見たことです。

わたしたちにとっても神からの呼びかけはいろいろな形で来ているはずです。**聖書の神のことばを通して**神はわたしたちに呼びかけています。と同時に、**今この世界に起こるさまざまな出来事も神からわたしたちへの呼びかけ**なのではないでしょうか。